



ヤコブは 12 人の子ども達に遺言しています。前はルベンから始まり、ダンまでの七人への言葉を見てきました。そして、一呼吸についての祈りは「救いを待ち望む」というものでした。今朝は遺言の後半部分です。

1. ガド、アシェル、ナフタリ (19～21 節)

①ガド (19) 「ガドについては、襲う者が彼を襲うが、彼はかえって彼らのかかとを襲う。」ガドはヤコブとレアの女奴隷ジルバとの間に生まれました。七番目の子どもです (30:11)。「幸運」という意味です。ラケルの女奴隷ビルハにダンと 21 節に出てくるナフタリが生まれたので、あせっていたレアの心も落ち着きました。このガドは彼に来襲者があっても、かかとめがけて逆襲するほどだとあり、ヨルダン川の東に土地を与えられるガドの踏ん張りが預言されています。

②アシェル (20) 「アシェルには、その食物が豊かになり、彼は王のごちそうを作り出す。」アシェルもビルハが産んだ子で、「幸せに思う」という意味でした。アシェルには後に地中海沿いの土地が与えられます。肥沃な土地でオリーブの産地でもありました。それは王のごちそうを作り出すほどであったということです。

③ナフタリ (21) 「ナフタリは放たれた雌鹿で、美しい小鹿を産む。」19 節でも見たように、ナフタリもラケルの女奴隷ビルハが産んだ子でした (30:8)。ヤコブの第六男です。それは「争う」という意味でした。彼にはガリラヤ湖から北の内陸に土地が与えられます。美しい小鹿を産むというほどに、その子孫たちには麗しさが備えられるということでしょう。

2. ヨセフ、実を結ぶ若枝 (22～24 節)

①若枝 (22) 「ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの実を結ぶ若枝。その枝は垣を越える。」そして、いよいよヨセフです。彼はラケルが産んだ子で、ヤコブの 11 番目の男子でした。ヨセフは「加える」という意味でした (30:24) ヨセフの数奇な人生については、創世記で読んできた通りです。彼にはマナセとエフライムという子が与えられ、ヤコブの養子となることも伝えられました。それゆえに、与えられた土地も「ヨセフ」という名ではありませんでした。マナセにはヨルダン川をはさんで東西に広大な土地が与えられました。またエフライムはさらに中心地に近い所に土地が与えられることとなります。ここには、ヨセフが「実を結び若枝」であること、「泉のほとりの実を結ぶ若枝」で「その枝は垣を越える」と言われます。つまりは、その祝福は大いに広がるということでしょう。

②弓を射る者は (23) 「弓を射る者は彼を激しく攻め、彼を射て、悩ました。」ヨセフには、「弓を射る者が彼を激しく攻め」とありますが、これは将来のことというよりも、すでに兄弟達から受けた仕打ちや、ポ

ティファルの妻による思いもかけない責め立てなどのことをも含むのでしょう。それらは、大いにヨセフを悩ませたのです。同時に、後の時代にその子孫に試練が押し寄せて来るということも意味しているのでしょうか。

- ③岩なる牧者 (24)「しかし、彼の弓はたるむことなく、彼の腕はずばやい。これはヤコブの全能者の手により、それはイスラエルの岩なる牧者による。」しかし、いかに相手の攻撃が激しかったとしても、彼自身に与えられた攻撃道具である弓は丈夫で、彼はそれを巧みに操るというのです。そのことをさせてくださるのは、いうまでもなくヤコブの主である全能の神であり、イスラエルの拠り所とする岩である牧者なのです。新約時代でいえばイエス・キリストなのです。

3. 祝福 (25~27 節)

- ①父の神により (25)「あなたを助けようとされるあなたの父の神により、また、あなたを祝福しようとされる全能者によって。その祝福は上よりの天の祝福、下に横たわる大いなる水の祝福。乳房と胎の祝福。」ヨセフは父なる神から恵みを受けるのです。以下、祝福という言葉が6回使われています。それは全能者によって与えられるのです。その祝福は天と地からもたらされます。天上からの祝福とともに、大地から神の恵みを受けるのです。地上では、砂漠地における水の祝福が備えられ、「乳房と胎の祝福」は子孫が広がるということです。
- ②ヨセフのかしらの上に (26)「あなたの父の祝福は、私の親たちの祝福にまさり、永遠の丘のきわみにまで及ぶ。これらがヨセフのかしらの上にあり、その兄弟たちから選び出された者の頭上にあるように。」ヨセフの父ヤコブからもたらされる祝福は、ヤコブの祖父アブラハム、父イサクにもまさり、非常に高い山の頂にも達するほどだということです。ヨセフの祝福は、11人の兄弟たちへの祝福にはるかにまさると伝えられました。ヨセフの歩んだ試練の人生への、主からの祝福のお言葉でした。
- ③ベニヤミン (27)「ベニヤミンはかみ裂く狼。朝には獲物を食らい、夕には略奪したものを分ける。」ベニヤミンは、ヨセフと同じ母ラケルよりうまれました。それも、ヤコブの一行がパダン・アラムからカナンへの道へ戻る途中、エフラテ (ベツレヘム) への道で、ラケルはベニヤミンを産んだ直後に命を終えました。ラケルは死の前、私の苦しみの子と呼んだのですが、ヤコブは「右手の子」という意味のベニヤミンにしたのです (35章)。ベニヤミンの子孫には、エルサレムの町を含むいわばカナンの中心地を与えられたのです。その部族は「かみ裂く狼」とありますが、戦いにおいて勇ましく戦うというのです。

《結論》

49章にあるヤコブの遺言は、12人の子どもたちへの祝福の言葉でありました (28節)。しかし、その前半にはルベン、シメオン、レビといった子たちには厳しい言葉が伝えられました。それは愛する子たちへの激励、戒めであったのでしょうか。一方、今朝読みました、後半の部

分
て

分
て
においては、ガド、アシェル、ナフタリにはまさに祝福の言葉と言っ

良い言葉が伝えられています。12番目の子ベニヤミンに対しても肯定的です。そして11番目の子ヨセフに対しての言葉が特別であることは一目瞭然です。ヨセフについては、前の章48章において、その子エフラムとマナセに手をおいて祝福をするという出来事がありましたが、この章においては、豊かで深い祝福の言葉が連なっています。長さにおいては四番目の子ユダへの祝福の言葉と同じほどで、祝福という言葉が何回も重ねられています。そして、その内容は、37章から記されてきたヨセフのこれまでの人生が総括されていると言っても良い祝福の言葉となっています。

ヨセフについて、父ヤコブは「実を結ぶ若枝」と述べて、ヨセフの子孫の将来が生き生きとした枝のようで実を結ぶと約束しているのです。しかし、これまでのヨセフの半生は23節にあるように、試練や苦難がありました。彼に対して、兄弟達すらが、彼に弓を射るように責め立てたのです。一生懸命に働いた主人ポティファルからも誤解されて、投獄されてしまう事態もありました。しかし、主はそこから脱出の道を開いてくださったのです (Iコリント10:13参照)。なんとパロの夢の解き明かしを通して、エジプトの宰相に抜擢され、その国の危機を救うことに貢献することになるのです。そして、飢饉の中にあつたカナンへの地から父や兄弟たちを迎え入れ、ヤコブの一家の救いのために尽くすことになったのです。ヨセフへのヤコブの言葉は25~26節において、祝福に溢れたものとなっています。

さて、ヨセフの人生はどなたかのことを暗示しています。そうです。イエス・キリストのことです。キリストは愛の限りを尽くされた後に、ピラトが罪を見出せないと言ったように、パリサイ人や祭司達の計りごとによって十字架での殉教の道に進みます。その苦難の様はどの福音書にも記されています。キリストは十字架につけられ、ついには死を受けました。それは、人間の罪のために身代わりとしての死でありました。ここにキリストの愛の極致があるのです。キリストは葬られて、三日目に復活されました。ここに希望があります。

あなたが今、失意のどん底にあつたとしても、苦しみのさ中にあつたとしても、キリストの福音によって死から命へと移されていく福音が示されています。ヨセフがどん底から引き揚げられたように、私達

もキリストによって大いなる祝福の道へと導かれていくのです。あなたもキリストを信じて、この恵みにあずかっていこうではありませんか。